

日本語名詞修飾の習得研究の展望 —名詞修飾と被修飾名詞の結びつきの観点から—

徐 乃馨

1. はじめに

名詞修飾は第二言語として日本語を習得する際、難しい項目の一つと考えられる。学習者の言語能力が発達するにつれ、伝えたい内容が複雑化し、より長い文の産出が必要になる。その際、的確にわかりやすく伝えられるような形式の習得が必要になってくる。名詞修飾はその一つだと考えられる(斎藤2002)。また、名詞修飾はほかの複文形式に言い換えられる場合があるため、どのような場合に名詞修飾、どのような場合にほかの複文形式が用いられるかを明らかにすることで、学習者の名詞修飾の習得の解明のみならず、ほかの複文の習得研究にも貢献できると考えられる¹。

野田(2005)によると、これまでの日本語教育文法では、名詞修飾は文法形式から出発し、日本語の使用実態や学習者のレベルに沿った教え方がされているとは言い難く、形式を基盤とする文法から、機能を基盤とする文法に変えるべきだと指摘されている。例えば、初級では、名詞修飾を名詞を限定する機能を持った表現と教えるべきだと述べている。

これまでの名詞修飾の研究は、名詞修飾と被修飾名詞の文法関係に関する研究が多いが、被修飾名詞に名詞修飾がついていることを前提に議論されることがほとんどである。しかし、被修飾名詞によって、名詞修飾と結びつくか否か、また、名詞修飾と結びつきやすいか否か、の違いがあると考えられる。

ところで、名詞修飾と被修飾名詞の結びつきといえば、形式名詞が思い出されることが多い。形式名詞は、実質名詞と違い、名詞修飾なしで使えないとされている。しかし、形式名詞に実質名詞的な用法もあり、学習者にとって、実質名詞と形式名詞の別だけで、名詞修飾と結びつくか否かが判断しきれない。

本稿では、まず次節で被修飾名詞の先行研究、とりわけ形式名詞についての議論について述べ、問題提起を行う。そして、3節で名詞修飾の先行研究について概観する。続く4節では、2節と3節で述べた日本語学的知見を踏まえ、名詞修飾の習得研究の成果と問題点をまとめる。最後に、名詞修飾と被修飾名詞の結びつきに焦点をあて、名詞修飾の習得研究における今後の課題を提示し、その方法論と注意点を考察する。

2. 被修飾名詞の先行研究

¹ 名詞修飾がほかの複文形式に言い換えられる場合、学習者が名詞修飾を使用せず、ほかの接続形式を使用することがあるが、談話展開が単調になってしまうという問題がある(増田2001、2002)。接続詞、接続助詞から名詞修飾へと習得が進むにつれ、使用する形式が変化することが想定されるため(例えば、親は怒った。そして、子供を叱った。→親は怒って、子供を叱った。→怒った親は、子供を叱った。)、名詞修飾の習得はほかの複文の習得と関連していると考えられる。

2.1 形式名詞についての議論

一般的に、名詞の下位分類の一つに、形式名詞と実質名詞がある（庵ほか 2000）。形式名詞は実質的な意味を持たず、名詞修飾なしでは使えないとされている。そして、形式名詞とは対照的に、実質的な意味を持つ実質名詞は名詞修飾なしでも使えるとされている（高見澤ほか 2004）。

しかし、松下大三郎氏が形式名詞という類を立てて以来、形式名詞をめぐる多くの議論がなされてきた。形式名詞の定義や種類が、研究者間で必ずしも一致するわけではない（奥津 1976、佐久間 1983、寺村 1992）。形式名詞とされるものの中で名詞修飾なしでも使用可能な用法がある。

- (1) 物は大切にしなければならない。（奥津 1976 : 204）
- (2) 時と所によって柔軟な態度を取ればよい。（奥津 1976 : 204）
- (3) 所を変えて飲みなおそう。（奥津 1976 : 204）

「もの」は代表的な形式名詞であるが、例（1）のように実質名詞的な用法もある。また例（2）（3）では、「とき」「ところ」はそれぞれ「時間」「場所」に置き換えられ、実質的な使われ方をされている。

そして、実質名詞は文脈によって実質的な意味をなさずに、形式化することがある。

- (4) どの映画を見ようかと家族で相談した結果、今回は息子が好きな映画を見ることにした。（金水 1986 : 607）

「映画」は実質名詞であるが、映画が前提とされている場合、下線部の「映画」は「もの」に置き換えられ、実質的な意味がない。

このように、実質名詞と形式名詞は置き換えられる場合があり、あらゆる名詞に実質名詞としての用法と形式化した用法があると考えられる（奥津 1976、寺村 1992、高市 1986）。これは学習者にとって、同じ名詞でも名詞修飾をつけて使用する場合（形式名詞として）と、名詞修飾をつけずに使用する場合（実質名詞として）があるということであり、大変混乱しやすい。

そこで、重要なのは、名詞が形式化する条件の明確化と記述である。奥津(1976:206)によると、「名詞の意味の抽象度と、文の内容の抽象度と、両者の関係とを記述し、いかなる場合に、いかなる名詞が修飾語を必要とし、その意味を特殊化しなければならないかを記述する」ことが重要だという。例えば、高市(1986:18)では、名詞が形式化する条件が二つあると分析した。一つ目の条件は、「名詞の指示内容が、そのかかり先の動詞にそっくり含意されている場合」である。

- (5) a. 私は、末永家と路地を隔てたその家に越してきたのだが、…
- b. 私は、末永家と路地を隔てたその長屋に越してきたのだが、…（高市 1986 : 18）

例（5）a では、引っ越す先が家であることが当然なので、家であることより、どのような家なのかの方が重要であるため、「家」が形式化している。一方、例（5）b では、「長屋」自体に「どのような家なのか」の情報が含まれるため、形式化されず、修飾語がなくても成り立つ。このように、例（5）a の中の「家」が形式化されるのは、「越

す」という動詞に「家」が含意されているからである。

もう一つの条件は、名詞述語の「主語が、その名詞の意味内容をそっくり含意している場合」である。高市 (1986) では名詞述語の主語に対する関係、特に種類づけの場合の形式化の例を指摘している。

(6) 須田家も大きい家である。(高市 1986 : 20)

(7) それもたいてい犯罪の記事か皇室の記事と決まっている。(高市 1986 : 21)

例 (6) では、名詞修飾の「大きい」を取り除くと、「須田家も家である」になり、同義反復になってしまう。また、例 (7) の主語「読む記事は」が省略されているが、名詞述語の2つの「記事」の名詞修飾を取り除くことができない。

このように、名詞を形式名詞と実質名詞に分けるには限界があり、名詞が形式化する条件を文の中で記述していく必要がある。その場合、どのような名詞が、どのような文の中で、名詞修飾を必要とするのかを明確化しなければならない。

2.2 名詞修飾との結びつき

動詞の研究に比べ、名詞の研究が立ち遅れていると言われている (仁田 1997、影山 2010、庵 2016、塚本 2016)。その理由として、動詞の研究は、動詞の有する様々な文法カテゴリー、多様な形態変化を手がかりとすることができるのに対し、名詞の研究は、見やすい形での下位分類も、文法的意味が顕在的な形式で現れることも少ないからだと考えられる。しかし、名詞の研究は重要ではなく、不必要であるということはない (仁田 1997)。

日本語文法の解明・研究全体に対する底上げのためには、研究の立ち遅れていた名詞への分析・記述を推進させることが、重要な要件になってくる。名詞への分析・記述が進むことで、新しい分析の視点が生まれてきたり (新しい視点が分析を可能にする、といった逆の関係も、当然存在する)、今まで手つかずであった現象への解明化の途が開けてくる、といったことが起こってこよう。(仁田 1997 : 49)。

実際、近年、名詞の性格を名詞修飾との結びつきの観点から捉えた研究がある。庵 (2007) では、名詞の有する結束性²を取り上げ、名詞の統語的性質として、「表紙、弟、上」などのように、「Xの」といった限定表現を必須的に要求する名詞が存在することを明らかにした。

(8) A : 昨日久しぶりに著書を読んだよ。

B1 : #ああそうですか。

B2 : えっ、誰の/#どんな? (庵 2007 : 148)

(9) A : 昨日久しぶりに本を読んだよ。

² 結束性：ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行/後続する文 (連続) に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する。この場合、その文連鎖は「結束的」であり、そのテキストには「結束性」が存在する (庵 2007 : 10)。

B1: ああそうですか。

B2: えっ、誰の／何の／どんな? (庵 2007: 149)

聞き手に何の前提もない始発文で (8) A を発すると、(8) B1 のような答えで談話を閉じることはできず、必ず (8) B2 のような疑問を誘発する。これは「読む」という動詞に目的語の項を要求するのと同じく、「著書」という名詞に「誰の」を要求するからである。一方、(9) A を発すると、(9) B2 のような疑問を誘発することもあるが、(9) B1 のような答えで談話を閉じることができる。それは「本」は「著書」と違い、「Xの」を必ず要求しないからである。庵 (2007) では、このような、項「Xの」をとる名詞を「有項名詞」(「著書」、項を取らない名詞を「無項名詞」(「本」と呼んでいる³。これはテキストの結束性へ寄与するのみならず、名詞の研究にも貢献し、名詞修飾の限定機能を裏付ける研究でもあると言えよう。

庵 (2007) の「有項名詞」「無項名詞」と類似した概念に西山 (2003) の「非飽和名詞」「飽和名詞」がある。「非飽和名詞」は「作者」、「飽和名詞」は「作家」のような名詞である。「あなたは作家ですか」と聞くことは可能であるが、「あなたは作者ですか」を聞くと、作品というパラメータの値を固定しない限り意味をなさないので、不可能である。「非飽和名詞」「飽和名詞」の区別と「無項名詞」「有項名詞」の区別が類似しているが、2つの点において異なる。一つ目は、「パラメータ」と「項」の違いである。「項」は必須的なものに限られるのに対し、「パラメータ」は必須性によって限定されたものではなく、複数可能な場合がある。二つ目は、「非飽和名詞」「飽和名詞」の区別は意味論的な議論の解明を目的とするのに対し、「無項名詞」「有項名詞」の区別はテキストの結束性、つまり統語論的議論の解明を目的とするものである。

また、建石 (2011、2016) では、名詞修飾の中で、指示詞と非指示詞につながりがあり、非指示詞の名詞修飾と被修飾名詞との間にも結びつきの差があると述べている。建石 (2011) では、非現場指示のア系指示詞には使用しやすい名詞と使用しにくい名詞があると指摘し、国立国語研究所編 (2004)、BCCWJ⁴、日本語教科書を分析した結果、上位概念を表す名詞 (例: 「人」「子」「男」「女」「日」「夜」) が非現場指示のア系を使いやすいが、相対名詞 (例: 「去年」「横」「翌月」「外」) が非現場指示のア系を使いにくいことが分かった。建石 (2016) では、指示的用法を持つ名詞修飾「問題の」「例の」を BCCWJ で分析した結果、「問題の」は具体的な指示対象を持つ名詞 (例: 「男」「家」「写真」) と結びつきやすいが、「例の」は具体名詞だけではなく、抽象名詞 (例: 「件」「話」「調子」「事件」) との結びつきも強いことが分かった。

名詞修飾の面から分析した建石 (2011、2016) とは逆に徐 (2015) では、被修飾名詞を明確にし、名詞修飾との結びつきを調査した。徐 (2015) では、学習者と日本語母語話者の作文における「人々」の使用を比較したところ、文の主語や目的語として、

³ 「有項名詞」・「無項名詞」: 庵 (2007) では、「有項名詞」を「1項名詞」、「無項名詞」を「0項名詞」の語を用いているが、「破壊」「研究」などの他動詞に由来する名詞は項を2つとるので、厳密には「有項名詞」とすべき (0項名詞を「無項名詞」とすべき) とある (庵 2007: 150)。

⁴ BCCWJ: 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)。

日本語母語話者は「喫煙者は周囲の人々に気を使い、時と場所を選んで喫煙すべきである」のように、すべて名詞修飾つきで使用するのに対し、日本語学習者は「人々はまだタバコを吸っている」「人々にタバコの毒について説明を受けるのが必要だ」のように、名詞修飾なしで使用する事が多く、指示範囲が不明確だという理由で不自然になってしまったと述べている。

このように、名詞の研究は、その重要性が認識されてきているにもかかわらず、動詞の研究に比べ立ち遅れている。しかし、最近の研究では、名詞の機能についての研究が進み、先行研究では名詞によって名詞修飾への要求が異なることが明らかになってきている。名詞の機能、とりわけ、被修飾名詞との結びつきの問題が、今後の名詞研究の一つの突破口になりえると考えられる。

3. 名詞修飾の先行研究—日本語学的観点から

3.1 名詞修飾の定義

日本語の名詞修飾に関する先行研究では、「連体修飾」「連体修飾節」「名詞修飾」「関係節」などの用語が見られる。本稿では、日本語記述文法研究会(2008)に従い、「名詞修飾」を使用し、語による修飾、節による修飾の両方を含むことにする。

先行研究を述べる際、「連体修飾」「関係節」など先行研究のままの用語を用いるが、ここで一度用語間の関係を整理しておく。まず、「連体修飾」と「名詞修飾」はほぼ同義であると考えられ、「連体修飾」は国語学で用いられる用語である。そして、名詞修飾のうち、節によるものは「名詞修飾節」と呼び、「連体修飾節」とほぼ同義であると考えられる(齋藤2002)。一方、「名詞修飾節」と「関係節」は範囲が異なる。「名詞修飾節」は先ほど述べた節による名詞修飾であるが、「関係節」は英文法の複文の4つの下位分類である「関係節」「補文」「副詞節」「等位節」の「関係節」から来していると考えられる。日本語の「名詞修飾節」は「内の関係」と「外の関係」に分けられ(寺村1992)、「関係節」は「内の関係」に、「補文」は「外の関係」におおむね対応する(堀江ほか2009)。ただし、「内の関係」は「関係節」より範囲が広く、「外の関係」は「補文」より範囲が広いことに注意されたい(寺村1992、堀江ほか2009)。以下、「名詞修飾」「連体修飾」「名詞修飾節」「連体修飾節」「関係節」「補文」の関係を図1で示す。

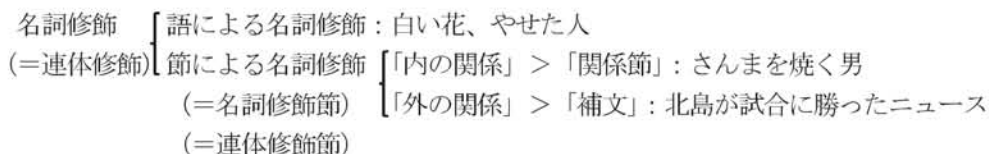


図1 「名詞修飾」用語間関係

3.2 日本語の名詞修飾の機能

名詞修飾の分類は3。1節の図1のような構造による分類がある一方、機能による

分類も可能である。

まず、名詞修飾は制限的なものと非制限的なものに分けることができる⁵。

(10) しかし、証券マンのすすめる株を買っても必ずしもうまくゆくものではない。(益岡 1995 : 139)

(11) 最初は丁寧に答えていた麻知子も、次第に疲れてきた。(益岡 1995 : 139)

例(10)の「株」の名詞修飾は制限的であり、ほかの株ではなく「証券マンのすすめる」ものに指示対象が限定される。これに対して、(11)の「麻知子」の名詞修飾は指示対象を限定するものではない。

制限的名詞修飾は被修飾名詞の指示対象を限定する機能を果たしているが、非制限的名詞修飾はどうだろうか。情報付加だけなのか(寺村 1992、三宅 2011)、情報付加だけではないのか(金水 1986、コーリヤ佐貫 1999、益岡 1995、西山 2003、山田 2004)について議論されている。そして、大島(2010)では、非制限的用法の機能も「制限」であると述べられ、加藤(2003)では名詞修飾の成立要件は「限定」とされている。

名詞修飾、とりわけ非制限的名詞修飾の機能について、ただ情報付加だけなのかどうかという議論の原因の一つに、機能の判断基準が統一されていないからと考えられる。例えば、名詞修飾を取り除くと文が成り立たないのか、文は成り立つが、文意が不明瞭になる、または変化するのかで、研究者間で必ずしも一致しているとは言えない。よって、ここでまず、コーリヤ佐貫(1999)、ソムキャット(2000)、増田(2001)、加藤(2003)などの先行研究で取り上げられ、「非制限的名詞修飾に関するもともとまとまった」(山田 2004)と言われる益岡(1995)を取り上げ、非制限的名詞修飾の機能について述べ、その後、ソムキャット(2001)、山田(2004)、増田(2001)について述べる。

益岡(1995)では、非制限的機能には情報付加と述定的装定があるとされている。情報付加の機能には、さらに、主節の事態に対する情報付加と、主名詞に対する情報付加があるとされている。主節の事態に対する情報付加には、「対比・逆接」「継起」「原因・理由」「付帯状況」の関係がある。

(12) いつもは孫に甘い祖父が、そのときばかりは、きびしい声で、きっぱりと言った。(対比・逆接)(益岡 1995 : 140)

(13) 控室に戻った私は、9分間、時間を過ぎたことを、係の人にわびた。(継起)(益岡 1995 : 141)

(14) 最後のバスに乗り遅れた僕はしようがなく橘寺をうしろにして一人でてくてく歩きました。(原因・理由)(益岡 1995 : 141)

(15) 「いいお天気だわあ。」と、門柱を軽く寄りかかるようにして空を見上げていた由美が言った。(付帯状況)(益岡 1995 : 142)

主名詞に対する情報付加は、名詞を文脈に導入するに当たって必要となる予備的、背景的情報を与えるものである。例(16)では、「婚約していた」という連体節で「大西

⁵ 本稿では、「制限的・非制限的」と「限定的・非限定的」を区別せず、「制限的・非制限的」を用いる。

明彦」と「私」の関係が示され、主名詞を円滑に文脈の中に持ち込み、文意を明瞭化できる。

(16) 「私、東京から来ました中川亜矢子と申します。実は、婚約していた大西明彦さんがここへ取材に来ていて、行方不明になったんです。」(益岡 1995 : 143)

情報付加は連体節を取り除いても文は成立するが、述定の装定は連体節を取り除くことができない。例(17) a は名詞修飾を省略すると、不完全な文になってしまう。その理由は、主節の述語が「自分が動揺する」事態を要求するからである。例(17) a は(17) b のような内容を表しているわけである。

(17) a. 修一は動揺する自分を感じながら言った。(益岡 1995 : 144)

b. 修一は自分が動揺するのを感じながら言った。(益岡 1995 : 145)

益岡(1995)で述べた述定の装定以外にも、ソムキヤット(2001)は、制限的と非制限的を分ける基準の一つである疑問のスコープに入るかどうかに関心を当て、非制限的連体節で疑問のスコープに入り得る連体節(「眼前描写」連体節)が存在することを指摘している。

(18) 事故の知らせを聞いた太郎が、大声で泣いた。(ソムキヤット 2001 : 12)

例(18)の連体節は、「どんな知らせを聞いた太郎が大声で泣いたのですか。」のように疑問のスコープに入り得るが、「太郎」に対して「制限的名詞修飾」と異なる限定⁶を行い、談話的機能として、「場面設定」を行っており、聞き手が当該の場面をイメージしやすくするという働きを持っている。

以下名詞修飾の機能の分類を図2で示す。カッコ内は対応する例文番号である。

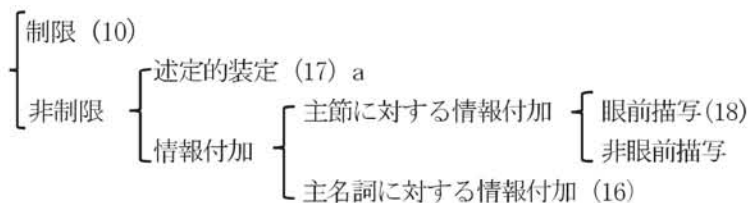


図2 名詞修飾の機能の分類

益岡(1995)に対して山田(2004)では、「どのような場合に非制限的名詞修飾が使用可能であり、その場合、対応する複文などの表現が存在するとすれば、なぜ複文ではなく非制限的名詞修飾表現が用いられるか」という基準は、名詞修飾の機能を考察するには大変重要だという。その基準に基づき、山田(2004)は名詞修飾で表現することで、構文的な冗長性を回避でき、よりコンパクトな表現を実現できると述べている。また、増田(2001)では、〈談話展開型連体節〉という非制限的連体節に注目し、①時系列にことを連ねる機能、②(現象・出来事)から「ヒト(行為主体)」へと視点を転換させる機能、そして③先行文脈をまとめ直し、主節に受け渡して関係づける機能

⁶ 制限的名詞修飾は主名詞をほかのものと区別する限定であるが、「眼前描写」連体節は主名詞自身の他の(時の)状態との区別をする限定である。

があるとされている。

3.3 名詞修飾の先行研究のまとめ

ここで、被修飾名詞と名詞修飾の結びつきについてまとめる。名詞修飾を要求する性質は形式名詞か実質名詞かで決めるものではなく、文の中での記述が求められている。これまで、名詞によって名詞修飾への要求が異なることが2節で述べたが、どのような名詞が、どのような文の中で、どのように名詞修飾を必要とするのかはこれから、明らかにする必要がある。

3.1節、3.2節で述べた被修飾名詞や名詞修飾についての日本語学的先行研究では、名詞によって名詞修飾を要求する性質が異なることや、名詞修飾は機能によって取り除くことの可能性や、ほかの複文に置き換えることの可能性が異なることが明らかになった。そのため、名詞修飾の機能に基づき考察を行っていく必要がある。図2を見ると、名詞修飾は機能が制限、述定の装定、「眼前描写」の場合、取り除くことができない。そして、構文の中でだけでなく、談話レベルにおいても場面設定、冗長性回避、談話展開などの機能がある。では、これらの日本語学的知見が、日本語の習得研究においてどのように生かされているだろうか。次節では、日本語の名詞修飾の習得研究を概観する。

4. 名詞修飾の習得研究

斎藤(2002)によると、名詞修飾は第二言語として日本語を習得する際、難しい項目の一つと考えられる。言語能力が発達するにつれ、伝えたい内容が複雑化し、的確にわかりやすく伝えられるような形式の習得が必要になってくる。名詞修飾はその一つだと考えられる。

第二言語習得分野では、構造的観点からの習得研究、とりわけ普遍的と言われている関係節可能性階層⁷(以下「NPAH」)を検証する研究が盛んに行われてきたが、一方、意味・機能的観点からの研究も近年見られる。

4.1 構造的観点からの名詞修飾の習得研究

構造的観点からの習得研究では、NPAHを検証する研究をL1習得研究とL2習得研究に分けて紹介する。

L1習得研究として、小熊ほか(1998)と大関(2008)などがある。小熊ほか(1998)では、小学校1年生から高校2年生、そして、大学生の作文を用いて連体修飾節の使用を分析した結果、大学生の使用は井上(1976)で示した日本語のNPAHとほぼ一致す

⁷ 関係節可能性階層(Noun Phrase Accessibility Hierarchy): Keenan & Comrieが世界の50以上の言語の類型学的調査によって明らかにした、関係節化されやすさの序列化、主語(SU) > 直接目的語(DO) > 間接目的語(IO) > 斜格(OBL) > 所有格(GEN) > 比較級の目的語(OCOMP)である。この序列はすべての言語に当てはまる普遍的な階層とされている。関係節の使用頻度や習得の難易度もこの階層に沿うと考えられている(斎藤2002、大関2008)。

る一方、「主体」「対象」「時」以外の関係の出現頻度が低いことが分かった。大関(2008)では5名の男児の縦断的発話、上村コーパス⁸より15名分の発話を分析した結果、主語(SU)、直接目的語(DO)、斜格(OBL)の間には、使用頻度の違いがなく、NPAHが予測するような文法関係の難易度への影響があるとは言えないことが明らかになった。

L2 習得研究では、桜木(2004)、大関(2008)などがある。桜木(2004)では、中国語母語話者1名の縦断的インタビューを分析した結果、5回の調査で使用された「内の関係」はすべて主格(「ひと」)、直接目的格、間接目的格であることが分かった。大関(2008)では、5名の自然習得者のインタビュー、3名の学習者の9カ月間の発話とKY コーパス⁹の90名のインタビューを分析した結果、KY コーパス以外のはっきりした傾向が見られず、KY コーパスにおいても主語(SU)の使用頻度が発達につれて高くなる予想を裏切る結果になった。

このように、日本語のL1、L2の習得研究結果から、日本語ではNPAHが習得の難易度または習得順序を決める要因ではない可能性があることが示唆された。

4.2 意味・機能的観点からの名詞修飾の習得研究

前節では、日本語のL1、L2の習得研究の結果から、NPAHの日本語への適用の限界を示した。英語の名詞修飾と異なる日本語の名詞修飾を捉えるには、構造的観点ではなく、意味・機能的観点から捉える必要があるとされている(増田2002、大関2008、2014、矢吹ソウ2013、松本1993、2014)。

意味・機能的観点からの研究は①主節と連体節との時間的關係(伊藤2012、増田2002、矢吹ソウ2013)、②被修飾名詞の分類(増田2002、矢吹ソウ2013)、③連体節の属性性・状態性(大関2008、矢吹ソウ2013)の3つの観点からの研究が多い。以下順番に紹介していく。

伊藤(2012)では、日本語母語話者と中国人学習者それぞれ10人のペアでの10分間談話を分析した結果、日本語母語話者は偏りなく使用するのに対し、学習者は「ル形」で「時間差なし」、「タ形」で「時間差あり」の連体節を使用することが分かった。

増田(2002)では、中上級学習者と母語話者の4コマ漫画の内容説明作文を使用し、学習者の産出傾向を分析した結果、学習者はストーリーの中の「行為主体者」を主名詞とする連体節や、主節の事態と時間差がある事態を表す連体節が使えていないことが分かった。

大関(2008)では、学習者が使用した連体節を属性性・状態性の高い順に、「属性・状態」「習慣」「進行」「過去・未来」に4分類した。左のものほど意味的に形容詞に近く、右のものほど特定時点の出来事や状態を表す修飾節になると考えた。自然習得者

⁸ 上村コーパス：日本語母語話者(54人)、非母語話者(56人)計120人に行った15分の日本語OPIの文字化テキストを収録したものである(日本語OPI研究会HP)。

⁹ KYコーパス：KYコーパスとは、90人分のOPIテープを文字化した言語資料である。90人の被験者を母語別に見ると、中国語、英語、韓国語がそれぞれ30人ずつであり、さらに、その30人のOPIの判定結果別の内訳は、それぞれ、初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている(日本語OPI研究会HP)。

と教室習得者の発話を分析した結果、自然習得者には「形容詞に近い名詞修飾節から使われる」という習得段階が観察されたが、教室習得者には教科書の影響で、早い段階から「過去・未来」の修飾節が使われることが分かった。

矢吹ソウ (2013) では、2年生を終了した学習者 30 名 (母語は英語・中国語・韓国語各 10 名) と日本語母語話者 20 名の 4 コマ漫画の内容説明作文 5 篇を分析した結果、増田 (2002) と同じく、「行為主体者」を被修飾名詞にとり、「時間差あり」の連体修飾節や、母語話者が使用する情報付加や談話展開のために用いる多重構造の連体修飾節が、学習者にあまり使われないことが分かった。また、大関 (2008) では「進行」の使用が非常に少ないとされるが、矢吹ソウ (2013) では「進行」の使用が見られ、インタビューとストーリーテリングの違いによると考察された。そして、「過去・未来」のうち「過去」を表すものがより多く使用されることが分かった。

4.3 名詞修飾の習得研究のまとめ

このように、構造的観点からの習得研究の結果から、NPAH が習得の難易度または習得順序を決める要因ではない可能性があることが明らかになった。そして、意味・機能的観点からの習得研究からは、①主節と連体節との時間的關係：時間差なし→時間差あり、②被修飾名詞の分類：被観察物 (者) →行為主体者、③連体節の属性性・状態性：「属性・状態」→「習慣」→「進行」→「過去・未来」、の順に習得が進むと明らかになった。以下図 3 で①名詞修飾部分、②被修飾名詞、③名詞修飾と主節の時間的關係、④名詞修飾の機能の 4 点から以上の結果をまとめ、習得状況を示す。

①名詞修飾部分		②被修飾名詞	③名詞修飾と主節の時間的關係	④名詞修飾の機能	難易度
属性・状態	形容詞的	被観察物 (者)	時間差なし	描写的	易
→習慣	↓	↓	↓	↓	↓
→進行	特定時点の出来				
→過去・未来	事や状態を表す	行為主体者	(時間差あり)	(談話展開的)	難

図 3 学習者の名詞修飾節の習得状況

習得研究では、②被修飾名詞を「被観察物 (者)」「行為主体者」に分け、習得の難易度を提示できたが、それぞれ名詞修飾なしでは使えるかが不明である。また、④名詞修飾の機能について、②被修飾名詞と③名詞修飾と主節の時間的關係の組み合わせから、描写的機能や談話展開的機能に当てはめたのだが、具体的に、名詞修飾を取り除き、ほかの複文に置き換えて検討がなされたわけではない。

このように、2 節、3 節でまとめたような、日本語学的先行研究で見込まれた①名詞修飾を要求する名詞の性質に関する習得研究や、②名詞修飾の多様な機能に関する習得研究は、見当たらない。その原因の一つとしては、これまでの名詞修飾研究はすべて名詞修飾があることが前提となっていた議論であり、名詞修飾がない場合の被修飾

名詞はどうなるのか、文がどうなるのかが検討されてこなかったからではなかろうか。しかし、名詞修飾がない場合を想定しなければ、名詞の名詞修飾を要求する性質も、名詞修飾の機能も分析できないだろう。

もちろん、構造は顕在的な表示形式があるが、機能は顕在的な表示形式がなく、どのような働きをするかの判断が難しいと考えられる。さらに、名詞修飾がない場合困難さが増すだろう。次節では、名詞修飾と被修飾名詞の結びつきの観点から、今後の研究の方向について考察し、使用できる方法論とその注意点を述べる。

5. 今後の展望—語彙と文法を連動させた研究

以上、日本語学的先行研究や習得研究を概観し、日本語学的に見込まれた①名詞修飾を要求する被修飾名詞の性質に関する習得研究や、②名詞修飾の多様な機能に関する習得研究がまだ進んでいないことが分かった。名詞修飾を取り除き、ほかの複文に置き換えなければ、名詞修飾と被修飾名詞の結びつきが見えてこないと考えられる。では、どのような観点から研究に着手できるのだろうか。新しい切口「語彙と文法を連動させた研究」がこの問題を解決する一手と考えられる。

5.1 語彙と文法を連動させた研究

日本語記述文法では、語彙の意味が文法に与える影響について研究されているが、日本語教育では、語彙と文法の連動がまだ進んでいないとは言えない。日本語の教科書や参考書を見る限り、語彙は語彙、文法は文法、文型は文型として教えられるのが一般的である。しかし、これからの日本語教育では、「語彙と文法を連動させた研究」が必要だと言われている（建石 2011、山内 2012、岩田 2013）。

その際、文法項目を明確にしたうえ、語彙の面から分析する方法（建石 2011、中俣 2014）もあれば、語彙の意味を明確にしたうえ、文法の面から分析することもできる（徐 2015）。

5.2 研究手法と資料

語彙と文法を連動させた研究を行うのに、どのような研究手法が考えられるだろうか。先行研究で用いられる方法が大いに参考になろう。5.1節に挙げた先行研究では①国立国語研究所編（2004）、②BCCWJ、対訳 DB¹⁰などのコーパス、③日本語教科書などのデータを複合的に扱った。

①国立国語研究所編（2004）は多くの語彙が網羅され、似た意味を持つ語彙を並べて考察するのに適している。国立国語研究所編（2004）以外、網羅的に日本語の語彙を考察できる山内博之編（2013）もある。山内博之編（2013）は言語活動と言語素材の両面から日本語教育のスタンダードを提示するものであり、話題による分類や、難易度別のレベル分けもあり、語彙を選出する際の基準が明白に提示できるため、日本語教育のための研究に役立つに違いない。

¹⁰ 対訳 DB:「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」(国立国語研究所)。

そして、②コーパスは日本語母語話者、日本語学習者の使用実態を質的、量的に分析し、学習者の不自然な使用の原因を突き止めることを可能にする。コーパスについては先ほど挙げたもの以外、母語話者のコーパスとして『日本語話し言葉コーパス』など、学習者のコーパスとして、日本語学習者6名の3年間の縦断的発話データが収録されている『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』(C-JAS)など、学習者と母語話者の発話データと作文データなどからなる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)などがある。

また、③日本語教科書を分析することで、日本語教育での扱いを明らかにしたうえで、学習者のレベルや学習目的に沿った導入順などを考えることができ、日本語教育への提案がより有意義なものになろう。

さらに、これらとは別に、習得研究で用いられる④ストーリーライティング、ストーリーテリング、そしてロールプレイなどの実験調査が考えられ、名詞修飾の機能を見ることができよう。

5.3 語彙と文法を連動させた研究を行う際の注意点

名詞修飾と被修飾名詞の結びつきを語彙と文法を連動させた研究手法で行うに当たり、注意すべき点が多々考えられる。特に、次の4点が重要である。

第一に、被修飾名詞の文の中における役割を考慮に入れなければならない。徐(2015)では、主語や目的語としての「人々」をデータから抽出し、名詞修飾をつけないという学習者の不自然な「人々」を突き止めたが、ほかの格の「人々」については不明である。また、内田(1995)では、児童の作文における名詞修飾を「文中のどのような役割の語を連体修飾で飾っているか」という点から分析した結果、学年が進むにつれ、述語を修飾する例が増え、被修飾語の文中での役割が多様化していくことが分かった。

第二に、名詞修飾の機能の判断が困難だと考えられるが、名詞修飾を取り除くと文が成り立たないのか、文意が不明瞭になるのか、そして、ほかの複文形式に置き換えられるのか、それぞれの場合、名詞修飾を用いる理由をしっかりと考察する必要があると考えられる。また、複数の日本語母語話者による判断も必要であろう。

第三に、被修飾名詞の名詞修飾を要求する性質以外、どのような性格を持つかもポイントになるだろう。建石(2011)では上位概念を表す名詞や相対名詞などを取り上げ、ア系指示詞との結びつきの典型を示した。大関(2008)では、NPAHの検証の際、被修飾名詞の有生性に注目し、学習者の「SUは有生の名詞を修飾するときに使い、DOは無生の名詞を修飾するときに使う」分布があることが示唆された。また、名詞の性格を考える際、名詞の下位種化を試みた仁田(2016)などが参考になろう。

第四に、名詞の名詞修飾を要求する性質はその名詞固有の特性なのか、臨時的な特性なのか、臨時的な特性ならば、どのような条件下で見られるのかを慎重に分析する必要がある。仁田(1997)では、名詞は複数の語彙—統語的特性を有することが少な

くなく、構文によって語彙—統語的特性が比喩的に獲得されるとある¹¹。

6. まとめ

以上本稿では、名詞と名詞修飾の日本語学的先行研究を踏まえ、名詞修飾の習得研究を概観し、これまでの名詞修飾研究はすべて名詞修飾があることが前提となっていたことが分かった。しかし、学習者の作文などに、名詞修飾がないことにより、文が不自然になってしまうという問題がある。そのため、名詞修飾がないことも想定し、名詞修飾と被修飾名詞の結びつきという観点から、名詞修飾の習得研究の切口を提案した。

①学習者に名詞修飾を要求する名詞と要求しない名詞の提示、②構文に止まらず、談話レベルにおける名詞修飾の多様な機能の提示が、中上級作文教育への貢献が期待される。その際、語彙と文法を連動させた研究が重要になってくるだろう。

参考文献

- 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版。
- 庵功雄（2016）「近代語から現代語における名詞修飾に関わる言語変化についての一考察—1項名詞に前説する限定詞を例に—」福田嘉一郎・建石始『名詞類の文法』くろしお出版、3-20。
- 伊藤絵梨子（2012）「和談データから見る連体修飾節の使用実態—初級日本語教科書との比較から—」『葛野』16、京都外国語大学、42-61。
- 井上和子（1976）『変形文法と日本語 上』大修館書店。
- 岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバカ—』くろしお出版
- 内田安伊子（1995）「児童の作文に見られる連体修飾節について：文中のどのような語を修飾しているか」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、37-49。
- 大島資生（2010）『日本語連体修飾構造の研究』ひつじ書房。
- 大関浩美（2008）『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版。
- 奥津敬一郎（1976）『生成日本文法論』大修館書店。
- 小熊利江、品川直美、山下直子、米沢久美子（1998）「連体修飾の使用状況に関する一考察」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、70-79。

¹¹ 例えば、「彼は漱石を読んでいる」では、「名詞『漱石』が〈書かれた物〉として解釈されるのは、一種の比喩的転用であり、基本的に、『N1ガN2ヲ読む』といった構文の『N2』の位置に使われることによる臨時的な語彙—統語的特性の付与である」（仁田1997：53）。

- 影山太郎 (2010) 「動詞の文法から名詞の文法へ」『日本語学』29 (11), 明治書院, 16-23.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 金水敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院, 602-624.
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書.
- コーリヤ佐貫葉子 (1999) 「日本語連体節における限定・非限定」アラム佐々木幸子『言語学と日本語教育』くろしお出版, 275-290.
- 斎藤浩美 (2002) 「連体修飾節の習得に関する研究の動向 (第 1 章 文法形式と機能の習得と使用)」『言語文化と日本語教育 増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線』お茶の水女子大学日本言語文化学会, 45-69.
- 佐久間鼎 (1983) 『現在日本語の表現と語法』くろしお出版.
- 桜木ともみ (2004) 「日本語学習者の使用する名詞修飾構造の特徴—中国語母語話者の縦断的発話資料の分析から—」『広島大学日本語教育研究』14, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座, 57-64.
- 徐乃馨 (2015) 「日本語学習者の『人々』の使用実態—書き言葉と話し言葉における連体修飾部の有無—」『第 26 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集』第二言語習得研究会, 75-76.
- ソムキャット・チャウエンギジワニッシュ (2000) 「『非限定』の連体修飾節に関する一考察—『眼前描写』の連体修飾節について—」『日本語科学』7, 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会, 7-22.
- 高市和久 (1986) 「『形式名詞』と名詞の形式化」『国語学研究』26, 東北大学文学部国語学研究刊行会, 13-23.
- 高見澤孟、伊藤博文、ハント蔭山裕子、池田悠子、西川寿美、恩村由香子 (2004) 『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』アスク出版.
- 建石始 (2005) 「日本語の限定詞の機能(要約): 名詞の指示の観点から」『神戸外大論叢』56(4), 神戸市外国語大学, 107-120.
- 建石始 (2011) 「非現場指示のア系と結びつく名詞の特徴」『語彙と文法を連動させた日本語教育文法研究』森篤嗣・庵功雄『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房, 189-214.
- 建石始 (2016) 「第 4 章 指示的用法を持つ名詞修飾表現研究—コーパスを使った『問題の』・『例の』・『あの』の分析—」福田嘉一郎・建石始『名詞類の文法』くろしお出版, 61-78.
- 塚本秀樹 (2016) 「敬語現象と名詞指向性—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究—」福田嘉一郎・建石始『名詞類の文法』くろしお出版, 143-166.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』くろしお出版.
- 中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版.

- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』 くろしお出版.
- 仁田義雄 (2016) 『文と事態類型を中心に』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』 くろしお出版.
- 日本語 OPI 研究会 http://www.opi.jp/shiryo/ky_corp.html (2017 年 2 月 7 日最終閲覧).
- 野田尚史 (2005) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版, 139-153.
- 堀江薫、プラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』 研究社.
- 益岡隆志 (1995) 「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志、野田尚史、沼田善子『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, 139-153.
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉『怒った親は子どもをしかった』という言い方」『日本語教育』109, 日本語教育学会, 50-59.
- 増田真理子 (2002) 「学習者はどのような連体修飾節を使っているか—日本語学習者が産出したテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集』3, 電気通信大学・東京学芸大学・東京農工大学, 43-50.
- 松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」『日本語学』12 (12), 明治書院, 101-114.
- 松本善子 (2014) 「日本語の名詞修飾構文—他言語の対照を含めて」益岡隆志、大島資生、橋本修、堀江薫、前田直子、丸山岳彦『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, 559-590.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版.
- 矢吹ソウ典子 (2013) 「日本語学習者・母語話者によるストーリーテリングでの連体修飾節の用法」『言語文化と日本語教育』4, お茶の水女子大学日本言語文化学会, 1-10.
- 山内博之 (2012) 「非母語話者の日本語コミュニケーション能力」野田尚史『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, 125-141.
- 山内博之編 (2013) 『実践日本語教育スタンダード』ひつじ書房.
- 山田敏弘 (2004) 「非限定的名詞修飾の機能」『岐阜大学 国語国文学』31, 岐阜大学, 1-13.

(じょ だいけい・首都大学東京大学院博士後期課程)